二十世紀における中国仏教のひとつの指標

——周叔迦（一八九九—一九七〇）の場合——

安藤智信

はじめに

文化大革命（一九六六—七六）後、今日までに、十二年を経過した。その間に新たな歴史の条件にたって中国文化総体についての見直しの作業が、中国において、各分野から営々と行われはじめていることは、いまや周知の事実である。

仏教、道教、キリスト教、イスラム教など宗教文化に対する再検討の大々的とりくみが行なわれはじめたのも、その一環をなすと考えられる。たとえば、一九七九年に、中国社会科学院、世界宗教研究所から『世界宗教研究』という雑誌が刊行され、今年までに、三十余集を数えるにいたっている。これは、現時点における、中国での宗教文化総体に対する本格的取り組みを象徴するものといわねばならないことがらである。

ところで、中国における仏教の中央組織が、中国仏教協会である。この協会の雑誌『現代仏学』は、一九六四年末に、〝その歴史的使命を終えた〟[1]として、停刊した。そして、一九八一年一月に、『法音』が創刊され、頭初は季刊であったものが現在では月刊誌としてやがて五十集に達しようとしている。『法音』の〝発刊のことば〟のなかで、会長の趙撲初は、この雑誌の趣旨と方向性について大要三点の指摘をなしている。第一点は、仏教教化という課題である。すなわち、中国全国の各民族、各地区の仏教団体、

名山大寺とその諸善識らと密接に連繋をもち、随時に各地での弘法利生の消息を報道し、また適宜、国際仏教の動静を紹介し、国内外仏教の紐帯のひとつとならしむこと。第二点は、仏教学研究に関する課題に言及する。即ち、仏教の文、史、哲など諸領域を研究し分析した学術論文を掲載する。同時に仏教の教理に対する通俗的紹介によって、社会への仏教普及と向上に資する。他方、一定の紙幅をもうけ、中国の兄弟民族と外国仏教学の名著・国際仏教学者の学術研究の成果を訳載し、中国各宗派を促進することにつとめるとする。第三の方向性として、仏教の教義の研究と紹介についての基本姿勢が述べられる。すなわち、各宗が平等に尊重され、〃在教言教〃と〃実事求是〃の原則を採用し、正信を闡揚し、仏法を弘伝することとする。宗教政策と宗教理論に関する問題に対しては、われわれはいつも学習する態度を大切にし、必要なる討論と研究を展開することによって、是非を明確にして団結を増強するという。以上三点からなる発刊の趣旨をのべ、最後に『法音』発刊の歴史的意義を次のごとく位置づけている。

現在、中国は四つの現代化を実現することを中心に据える新時代に踏みこみ、各方面の建設事業が、順調にその目的に向け発展しつつある。この歴史の要請に適応し、よく弘法の作業をなし、われわれは十分に学習して、政府の宗教政策の貫徹に協力し、団結をもって、全国仏教徒が一致協力し、仏教の優れた伝統を発揚し、人類の平和幸福事業の発展と人間の浄土を実現するために貢献しよう！と。これは、きわめて格調ある発刊のことばであるといわねばならない。

『世界宗教研究』や『法音』にかぎらず、中国文化総体のなかでの宗教に対する自由で開放的な取りくみは、中国の一般学界にも及んできている。中国の文物資料全般を対象とする『文物』（月刊・北京・文物編輯委員会編輯）の内容においても、近十年の傾向に明確にうかがうことができることがらである。従って中国学専攻者としては、中国学界の動静と、その資料紹介や研究成果に対して、無関心であるとはゆるされないというのが、現今でのこの分野の状況といわねばならないのである。

さて、一九八五年に、中国社会科学院世界宗教研究所・研究室主任の楊曾文が、大谷大学の真宗総合研究所で〃中国の仏教研究〃について講演されたことがある。そのときに、近代の中国仏教研究を切り拓いた先駆として、陳垣（一八八〇―一九七一）・湯用彤（一八九三―一九六四）とともに、周叔迦（一八九九―一九七〇）の名を挙げられている。②

周叔迦とは、わたくしは生涯忘れ得ぬ御縁をいただいたこともあり、懐しさをおぼえたことである。そのご縁について今年（一九八八年）一月に出た、「周叔迦さんのこと」（大谷大学広報六二―五号）で、わたくしのささやかなかかわりの範囲内で、周叔迦のことを紹介したことがある。そこでも述べたことであるが、『法音』誌上に、先生の三点の遺文が掲載された。[3] 加わえて、その門弟と思われる蘇晋仁が、周叔迦先生の生涯とその業蹟を詳述した文章[4]をものし、智淵が先生の『法苑談叢』紹介の文[5]をあらわし、それぞれ同誌上にみえることとなった。これらの資料によって、楊曾文の見方が決して誇張されたものでないということを知らしめられるのである。

一　周叔迦と書香盈庭の環境

わたくしは、先にのべたごとく一年ほど前に周叔迦について、かつていささかの個人的なかかわりで、その憶い出を紹介した。そのなかで、文末において周叔弢・周紹良・周一良らとのつながりについて言及している。ところが忽卒のうちに、調査したところによって書いたために、ひどい誤記をしていることが判明した。この機会に是非ただしておきたい。周叔迦の一族について、いま確実に云いうることを図示してみると、左表のごとくである。

ひとの一生をみるとき、その生い立ちは、そのひとの生涯に大きな影響を与えることはいうまでもないことである。そこで、この表に見える範囲で、いくつかの史料を通して、

まずのべておくこととする。

周叔迦の祖父・馥と、父・学熙については『アジア歴史事典』などにゆずり、ここでは省くこととする。

最初にいとこの周叔弢とその三人の子息からみてゆく。『周叔弢先生六十生日紀念論文集』（一九六七・龍門書店）という書物があり、その冠頭のところに次のごとくみえる。

敬以這本紀念論文集祝賀
三舅父
父親的六十生日、並向撰文和題簽的先生們致誠懇的謝意！

周珏良
孫師匡
孫師白　謹識一九五〇年七月
周一良
周艮良

すなわち、一九五〇年に周叔弢生誕六十年を祝賀する論文集であることがわかる。さらに、次のごとき出版説明が載せられている。

周叔弢先生、名は暹、字は叔弢、安徽秋浦の人、光緒十六年（一八九〇）に生まる。清の両江総督（一九〇四年十月三十一日から一九〇六年九月二日に至るまで）、両広総督（一九〇六年九月十五日から一九〇七年五月二十八日に至るまで）の周馥の孫、光緒壬辰科（一八九〇）の進士周学海の子、北洋財政総長（一九一二年七月十二日から一九一三年九月四日に至るまで）周学熙の姪なり。一門の書香は庭に盈ち著述あり、或いは文史をもって著われ、或いは金石をもってすぐれ、或いは科学をもって盛られ、或いは詞曲をもってたたえられる。唯だ先生はひとり蔵書をもって富まれ、もっとも版本の学に精わし。一九五十年七月、先生六十の生日の為に、その哲嗣周一良、珏良、艮良と甥孫師白、師匡兄弟は、特に論文を徴集して、紀念す。文を選する者、金克木、顧頡剛、顧廷龍、謝国楨、銭鍾書、鄧以蟄、鄧之誠、劉修業、斉思和、趙万里、陳夢家、陳寅恪、張政烺、馬堅、唐蘭、俞平伯、季羨林、周紹良、周祖謨、周叔迦、余嘉錫、向達、王鍾翰、王遜、王重民、王玉哲、王永興、王文進、丁声樹らのごときは、皆、学に専擅あり、名は当代に重んぜらる。

原書は、周・孫二家合刊梓行せるにより、海外にもとより伝本乏しく、即ち海内もまた、拱璧を視同し、罕見の奇珍と堪称せんとす。よって影印流通し、もって読者にこたえんとす。

右は、一九六七年二月、出版の際の説明文である。これ

によって、一九五〇年の祝賀の意義が委細にわたって知られることである。[6] なお、周叔迦はこの論文集では、「三論師遺説考緒言」を著わし、周紹良は「関索考」をもって、叔弢の生日を祝賀している。

次にはじめの表に示しておいた周紹良について少しく言及しておきたい。わたくしが、周叔迦の子息であろうと考える手がかりは、ごく最近まで次の資料だけである。それはその内容について、いささか、のちに述べるはずの、周叔迦の遺著といわれる「漢文《大蔵経》中大乗経分類法的商榷」（『法音』一九八二―四）が発表される過程においてみることができる。すなわち『法音』の十六頁の脚注に、

這是周叔迦居士的一篇遺稿、写于一九六四年。一九八〇年五月因清理書籍、在故紙堆中翻出。現徴得周紹良先生的同意、全文発表于此、供関心此事的専家、学者参考。――編者

と記されている。故人の遺稿を発表しようとする際に、まず遺嗣の了解をとることを前提とすることが、常識として考えられる。[7] しかし、周紹良は先に触れたごとく、叔弢の論文集に、周叔迦と共に、論文を呈していることからみても、両者の年代はさほどはなれていないと予想された。

すなわちひょっとしたら周叔迦の子息でなく舎弟かも知れないという疑問が去らなかった。しかるに近ごろ、白化文というひとが書いた「周紹良先生的学術活動」[8]という一文を読み、この疑問は氷解しえたのである。すなわち、

周紹良先生、安徴至徳県（今為東至県）人。一九一七年生。周先生出身于一個学術世家。……（中略）……父親周叔迦居士、是著名仏教学者、曾任教于清華・北大・民国・中国・中法諸大学、著有『中国仏教史』、『八宗概論』、『因明新例』、『新唯識論』諸書、著述極為豊富。

というのである。

これまでみてきたところから、周叔迦の一門は、文字通り、〃書香盈庭〃の家系であったということが、十分に知られたことである。

二　蘇晋仁の「傑出せる仏教学者と教育者たる周叔迦先生」について

前節で、周叔迦を囲むまさしく〃書香盈庭〃の相貌について知ったうえで、いよいよ周叔迦の残した諸事績をたずね、その生涯をかけて、かれが何を目指して歩んできたのかをたずねてみようとするものである。

その際に、表記のごとく、われわれの案前には、すでに、

周叔迦死後十年余にして蘇晋仁が論じる「傑出的仏教学者和教育家周叔迦先生」（『法音』一九八二―一）がある。四頁に余る紙面に周叔迦が活写されつくされたといってもよい伝記である。おそらく、〃周叔迦伝〃として今後とも不朽といって過言ではないと考えるものである。

著者の蘇晋仁は、この文中で一度だけ周叔迦とのかかわりを記している。すなわち、

同年（一九四一―筆者にて補う）また仏学研究会を設立し、仏教史志六種を編緝し将来、仏教の歴史を編写するための基礎を奠定せんとす。一、仏教金石志（楊殿珣担任）、二、仏教芸文志（蘇晋仁担任）、三、仏教寺塔志（劉汝霖担任）、四、仏教法論志、五、仏典輯佚（王森、韓鏡清担任）、六、二十四史仏教史料滙緝（黄誠一担任）なり。数年の後、あるものはすでに、成書に近づく。積稿は法源寺の中国仏学院に原存するも、文化大革命中に惜しくも多く散失せり

とある。これによると、仏学研究会によってこの壮大な企画は、四半世紀をかけたものということになる。換言すれば周叔迦のライフワークたる〃一大仏教研究大系〃ともいうべきとりくみであったはずである。蘇晋仁はその重要な一角を担任していたわけである。まさに周叔迦に永年にわたり私叔した蘇晋仁が著わした伝記なればこそ、きわめて濃い内容のものとなったことがうなずかれる。

したがってこの節では、蘇晋仁の書いたこの伝記を正しく読むということが、唯一もとめられていることがらなのである。

〃伝記〃は生涯の履歴を次のごとく紹介している。

先生の原名は明夔（一八九九―一九七〇）、字は志和、後に名を叔迦と改む。筆名は雲音、演済、滄洈、水月光なり。室を最上雲音と名づく。至徳県（今の東至県）の人にして、安徽の世家に出身され、祖父は清代の両広総督周馥であり、父親は北洋政府財政総長、周学熙なり。一九一八年、上海同済大学工科に肄業せり。一九二七年、青島に旅居し、三蔵を精研す。一九三〇年に北平に来り、北京大学、清華大学、中国大学、中法大学、輔仁大学、民国大学校の教席を歴任して、仏学を講授す。解放後、中国・ネパール友好協会副会長、中国民主同盟北京市委第五支部負責人に任ぜらる。一九五六年、インド摩訶菩提会は推して終身会員とする。一九六四年、当選して第三期全国人民代表大会代表となる。

次に〃伝記〃の冠頭部分に、周叔迦の人柄と仕事の骨格

について記述されている。

周叔迦先生は、一人の仏典を精研し、学識淵博なる学者であり、仏教文化を研究し、仏教教育を弁理することを倡導した実行家であり、また、仏教の虔誠なる信仰者にして、社会活動家であった。

かれは孜孜として倦むことなく三蔵を鉆研し、深く入って仏教哲学を理解し、理解の真確より、誠篤なる信仰を産生し、進んで身体で力行す。数十年来、先生は仏教哲学を講授し、仏教典籍を整理し、仏教学術研究を領導し、仏教文化団体の仕事を主持し、漢蔵仏教を溝通し、仏教研究の人材を培養し、かつ著述すること、身のたけにも達せり。任務はかくのごとく繁重艱巨なるも、先生は欣欣然として、仏教文化を発展さす事業のために、嘔心瀝血さる。

先生は襟懐坦白、和藹謙虚にして、己を律するに甚だ厳にして、人を待するに極めて寛ろくす。後進に対してはもっとも愛護をなし、善誘循循もて、親切指導さる。平日、みずからは極倹を奉じ、事業の需むる所には、すなわちその有るところを罄くし、かつ毫も名利の心なし。仏教は〃信解行証〃を注重す、先生は畢竟に、この一つの理論に遵循して、これを実践に付さる。

先生の思想進歩し、解放前にすでに、民主同盟会員にして、抗日戦争勝利後に、北平にて一定の任務を担負し、民主人士たちと声明を発表して、蔣介石のファシスト統治に抗議さる。解放後、先生は歓欣鼓舞し、党の領導を擁護し、社会主義の祖国を熱愛し、積極的に政治活動に参加し、党の宗教政策を貫徹し、国内外の仏教徒と団結し、国際文化交流を強化するために、積極的に貢献されり

と。

この部分はきわめて多くのことが盛りこまれた内容となっている。

その生涯にわたって、周叔迦に一貫してその底に流れる姿勢と仕事の核心は、仏教史、仏教教理研究への倦むことなき意欲的とりくみであり、そこで得られた確信が、かれを敬虔なる仏教信仰者たらしめることとなっているという。それと、〃信解行証〃の仏教の信行の具現化という大切な課題について、生活の場で、社会に向って実践するという、たくましい行動の仏教者へと展開していることが、強く印象づけられることといわねばなるまい。

ここで、蘇晋仁は周叔迦のなした多くの貢献についての

べている。それらはおよそ次の六点ほどにまとめることができよう。

A、仏教学研究の領導と仏教典籍の整理
B、仏教の国際交流への貢献
C、仏教文化事業への貢献と仏教文化団体の主宰
D、仏教研究の学徒の養成
E、尨大なる仏教著述と雑誌の刊行
F、中国仏教協会における活躍

そこで、蘇晋仁の〝伝記〟によって、A～Fまで、順次に各項についてながめてゆくこととする。

A　仏教学研究の領導と仏教典籍の整理

一九二七年から三〇年まで、すなわち、周叔迦二十歳代の後半に、青島で三蔵を精研した。そして三〇年には、いよいよ北平（現、北京）へ出て、本格的活動をおこした。同年に、有名な『牟子叢残』（弢社叢書配印本）を著わし、学界に登場した。[9] そして、三十三年に、『中国仏教史』第一編（最上雲音室所本）と『中国仏教簡史』（一九六二・中国仏学院油印本）の二著で、二千年間の中国仏教史を、七期にわけて、大量の史料を駆使して、仏教が歴史上、学術思想上に及ぼしたはたらきを大に解明し、ついに、一家を成すにいたったという。このころから四九年の解放のころまで、中国仏教史研究において、周叔迦は、湯用彤・黄懺華とならんで、〝仏教史学の三家〟と称されたと、蘇晋仁はいっている。

次に、仏典整理の上で、周叔迦の面目が最大限に発揮されることになる。それは、北平図書館に入庫された、八千点余の敦煌文書の整理とその内容目録作製のときのことであった。

三十年以降永年にわたって、周叔迦が敦煌学に対し、大きな貢献をなしたことは、陳垣と王重民の叙述によって知られる。『敦煌劫余録』十四巻は、陳垣が、責任者となってつくられた。その第十四巻について、陳垣は〝序〟でわざわざ次のごとく言及する。

第十四帙中に、また〝続考諸経〟があるが、ちかごろ秋浦の周叔迦の考定になるもので、あわせて編入す。

と云って、周叔迦に礼を尽している。このことがらについて、蘇晋仁は、

ここにみえる〝続考諸経〟とは、すべてで八十六部・二百点以上の残巻ばかりで、もし周氏の仏典に対する淵博なる知識と細心な考覈のたすけがなければ、これらの残巻は不明のままとなったであろう

と、その感想を述べている。

さらに周叔迦の敦煌学への貢献は、その後も、ながく続いたのである。そのことは、王重民の『敦煌遺書総目索引』の〃後記〃において詳説されている。すなわち、

敦煌劫余録の編制は、すでに非常に高い水準に到達しているといえるけれども、失題の仏経残巻に対して、考証できる経名も、もっと多いから、ただわれわれとしては、これでもって満足するものではない。周叔迦先生は、〃続攷諸経〃の基礎の上から、さらに、〃俟攷諸経〃の中から三種を攷出されたのみでなく、あわせて〔劫余録—筆者に補う〕全録について、新たに攷査をおこない、その中で、あやまりあるもの五十二種を攷出された。そのようなあやまりは、多くは、著録上のあいまいさから生まれるが、あとから調べられるものとなりにくいことである。衆律の残巻のごときは、敦煌劫余録の四三二から三頁までに、まとめて〃戒律〃とのみ著録しているが、叔迦先生は、その中に律名のあるもの二十六種を攷出されている。また瑜伽師地論の註解は、敦煌には多種のものがあるが、劫余録の四三五から七頁までに、まとめて〃瑜伽師地論〃とのみみなして、註解の名称を挙げることができなかったが、叔迦先生はまた、その中に原名を有するもの十一種を攷出されている。これらは、まったく、敦煌遺書の目録作業のなかで、もっとも困難ではあるが、また徐々にでも解決しなければならぬ問題であり、この方面で、叔迦先生の貢献はきわめて大きいものがある。

という。そして、この〃後記〃のあとに、王重民は、『敦煌劫余録』でのあやまりであると、周叔迦が攷定した五十二点の仏典名と、〃俟攷諸経〃で、新たに周叔迦が発見した三点の仏典名を列記している。なお蘇晋仁は、王重民のこの叙述に対して、次のごとくその所感をのべている。すなわち、

王重民先生は生涯かけて、敦煌学を専門に研究しているので、その甘苦の味を知らる。このことからも、（周）先生の仏教の三蔵に対する了解が、精深広博であったから、はじめて、このような成果があらしめられたという風にみることができる

という。

思うに生涯にとって、大切な年代である二十代後半に青島での、「三蔵を精研す」という三年間の基礎から、周叔迦は、このような大輪を開花させたことといわねばなるまい。

B　仏教の国際交流への貢献

先にみたごとく、一九四九年に、中国・ネパール友好協会副会長に任ぜられた。また五六年に、インド摩訶菩提会から推されて終身会員となった。これから、西方仏教国へ周叔迦の関心が比重をかけていたことは明かである。思うに、この二つの事柄の以前に、チベット解放のはるか前から、チベット仏教研究への大きな貢献があることを銘記すべきであろう。蘇晋仁は、

一九三六年に、北平仏教界は、漢蔵仏教交流のため、〝菩提学会〟を建立し、先生は常務理事に任じ、蔵文班を設立し、チベット仏教に対する志趣のある人を培養するため、蔵文を学習し、蔵文仏教典籍を伝訳することに従事した。解放後の一九六二年、商務院書館は、『仏教史籍叢書』の出版をはかり、先生に主編を請うた。先生は、チベット仏教典籍で、『プトン仏教史』・『青史』・『土観仏教史』[10]・『西蔵王臣史』・『印度仏教史』[11]などをもって、漢文に翻訳するように、ひとにたのんだが、なお全部訳成しないうちに、運動（文化大革命――筆者に補う）が突発し、この一つの弘大な計画は泡影と化してしまえり

という。このことは、次項のC、で言及する〝仏教史志六種〟と同じような運命を、たどることとなり、周叔迦にとって、その痛恨が察せられることといわねばならない。

C　仏教文化事業への貢献と仏教文化団体の主宰

仏教文化事業への貢献としては、まず、一九三三年には、北京刻経処を主管し、『名僧伝鈔』・『性相津要』・『信力入印法門経』などを校刻している。ついで、三五年に、周叔迦は、欧陽漸（一八七一～一九四三）や葉恭綽らと共力して、山西省趙城の広勝寺所蔵の金代蔵経を調査し、その中から罕見の珍本を選択し、影印して『宋蔵遺珍』三集、全四十六種・二百五十五巻をつくっている。その翌三六年になると、周叔迦は、徐森玉・徐蔚如らと、資財を募り、方刪大蔵経を刻み、全国各地の諸刻経処の本を集合し、百衲書刪本〝龍蔵〟をつくることをおもいたった。しかしこの大事業は、日中戦争による時局の悪化などで、完成しなかったという。そして、四一年に、仏学研究会を設立し、〝仏教史志六種〟を編集し、将来、仏教歴史を編纂するための基礎をおいた。この企画について、本節のはじめに示した通り、蘇晋仁も参加している。文化大革命時まで、二十五年余をかけた大事業であった。文化大革命のために、その原稿の多くが散佚したというのは、惜しみても余りあるといわねばならないことである。

次に仏教文化団体の主宰ということでは、是非、〝居士

林〃のことを銘記しなければならないであろう。

一九三六年に、周叔迦は、華北居士林の理事長となり、在家の仏教信徒と交わり、そこで維摩経や法華経などの仏典を、みずから講じた。四〇年には、居士林図書館を建立して、仏教書籍分類法を制定し、蔵書万余巻を公開閲覧に供している。さらに翌四一年に、居士林に仏画研究会を設立し、学員を招集し、仏画を研習し、黄賓虹・徐石雪らを招き、教授に当らせ、周叔迦も講義に参加し、いくたの仏教美術を研究する人材を養成したといわれる。

D　仏教研究の学徒の養成

周叔迦は、仏教学を研究する出家・在家の学徒の養成にも、大いに尽力した。一九四〇年に、中国仏教学院を瑞応寺ではじめ、院長となり、尼衆のために分院を、弘善寺に附設した。中国仏教学院では、預科と本科を設け、本科は教理系と文史系に分けている。みずから講義するほか、経営をもきりもりして、全力をつくした。経費支出のために自己をささげ、自分の住宅までも売りに出すほどであった。修学を終えたものは、南北各地の廟宇におもむき、多くのものは大切な働きをなし、あるものらは解放区に入り、革命工作に参加したといわれる。

E　尨大なる仏教著述と雑誌の刊行

周叔迦の著わした仏教著述について、まず著書について、蘇晋仁は、大要、六分野に分類している。(イ)、仏経の注釈に関するもの、(ロ)、戒律に関するもの(ハ)、論に関するもの(ニ)、仏教学概論に類するもの　(ホ)、経典と仏典からの選文集に類するもの　(ヘ)、未刊の原稿六点などのごとくである。その次に諸雑誌に載せる約五十余編の諸論文の中から、代表的なものを列挙してくれている。また、一九六〇年に、中華書局の『法苑珠林』百巻の校点作業では、各条の引文に、すべて原文の出拠を調べあげられたことに、蘇晋仁は敬服している。

次に周叔迦は、雑誌の刊行を、盛に行っている。まず、一九三六年に、仏教界の知名人士と編集委員会を組織して、『微妙声』（月刊・菩提学会刊）を出版し、四〇年までに九期を出している。さらに、同じく四〇年に、『仏学月刊』（中国仏教学院出版）を主宰して、四四年までに三十余期を刊行した。また『中国仏学院年刊』一冊を出版している。これは、中国仏教学院の教員の研究心得を内容としたものといわれる。

F　中国仏教協会における活躍

解放後の新中国建設にあたり、周叔迦はさらに精神をふるいたたせるにいたり、心に深く期するものがあったよう

である。一九五三年に、中国仏教協会に参加することをおもいたち、七〇年一月に、心臓病と腎炎に冒されて死するまで、新中国の仏教事業のために、多くの仕事を行ったことは、広く知られていることである。そのなかから、周叔迦の貢献した五件のことを、蘇晋仁はとくに強調している。

その第一は、一九五五年、スリランカ仏教徒が、釈迦牟尼涅槃二千五百年を紀念するために、英文の『仏教百科全書』を編纂することとし、中国政府に共力を要請してきた。周恩来総理は、スリランカ首相の申し入れをうけいれ、中国仏教に関する必要項目を提供することとし、交渉窓口に中国仏教協会が当ることとなった。周叔迦は編纂委員として、その遂行に向けて全精力を傾注したという。その第二の仕事として、房山石経の拓印が指摘されている。一九五五年に、調査などが開始された。近時、われわれの案側に、その成果が、つぎつぎと届いていることである。第三に、一九五五年に、全国に散在する石窟調査を、閻文儒らとともに開始したことが挙げられている。次に第四の仕事は、一九五八年から六十四年まで、北京・西山霊光寺の仏牙舎利塔を修建するに当り、周叔迦は、その事に参預し、六年の長い時間をかけ、やっと竣工した。これはひとり新中国仏教界の大事業であるのみでなく、東南アジアの仏教国からも、熱い注視をうけたことであったといわれる。最後の第五は、一九五六年に、中国仏教協会が、中国仏学院を法源寺ではじめ、周叔迦は副院長と教務長となり、みずからも教授した。後にまた研究部を成立し、仏教史研究組と教理研究組に分け、因明、瑜伽等の経論および南伝上座部とチベット中観学を学習研究することとした。また別に蔵語仏学系を設け、蔵・甘・青・川・滇の蔵族地区の著名寺院から来る学僧を養成し、新中国のために、大いに研究と教育の能力をそなえた人材を育てることとしたという。

周叔迦は一九五三年から七〇年までの十七年間の長期にわたって、中国仏教協会を拠点として活躍した。青壮年期に、仏教学研鑽を基盤として構築したところの、この世に仏教を現成するために、中国仏教協会がもっとも、適した拠点であると、周叔迦は信じていたことと考えられるのである。

蘇晋仁が著わしたいわゆる〝周叔迦伝〟にもとづいて、周叔迦のひととなりとその業績を、わたくしなりに整理すれば、大要以上のごとくである。

三　晩年における仏教著述三編

前節のなかで、周叔迦の諸業績中、Eの尨大なる仏教著

述と雑誌の刊行の項の(ハ)として、未刊の原稿六点が存すると、蘇晋仁は記している。[12] ここで、わたくしがとりあげようとする三編の晩年の仏教著述は、それらと全く無関係の原稿ばかりである。周叔迦の箧底から、中国仏教協会が、晩年に近いところの著述三部を選択して公刊に付したものと考えられる。それでは、『法音』での載録順に述べることとしよう。

「漢文《大蔵経》中大乗経分類法的商榷」（漢文の『大蔵経』の範囲での、大乗経の分類方法をめぐる諸問題）は、その脚注によって、一九六四年に書かれた論考であることがわかる。

この論考は、大乗経典分類にあたり、考えらるべき原則を、当時すでに、ほぼ四十年も仏学にとりくんだ周叔迦が、全蘊蓄をかたむけ、きわめて強い筆致で書いたものである。中国では、一九六二年に、『中華大蔵経』刊行の準備が始ったと周叔迦はいう。[13] そして当然、周叔迦も、その作業になにがしか、加ったごとくである。

周叔迦の考え方によれば、大蔵経をどのように分類してあるか、ということが、その大蔵経の生命を大きく左右するくらいに、重大な意味を持っているのである。当時、中国では、華厳・宝積・般若・涅槃という四分類法でいこうという考え方が、大勢を占めていたということが、この論考の内容からよくうかがえる。それに対して、周叔迦は、知旭の『閲蔵知律』の六分類法や、『大正大蔵経』の十分類法という二つの先行するものと対比させながら、目前の四分類法を論難する。その分類法は、現時点の仏教研究が到達した地平を象徴するにふさわしいものであるべきだというのである。すなわち、この『中華大蔵経』は、先行の『大正大蔵経』の分類法の問題点を克服するものであるべきだと、云わんとしているのである。まことに説得力をもつ論考といわねばならない。

『法音』誌上に、二番目に登場したのが、「法苑談叢」である。これは、全編が十章からなり、一九八五年に、『法音文庫』（中国仏教協会発行）のひとつの単行本として広刊されたと、知淵が紹介している。[14] 前半五章の部分は、『法音』に、五回にわたって掲載されている。[15] しかるに、本稿の前節ですでに知ったところであるが、一九四一年に、周叔迦は仏教学会を組織し、文化大革命のときまで、四半世紀以上をかけて、〃仏教史志六種〃という壮大な構想をもっていたのである。『法音』に載る「法苑談叢」の構成は、一、寺院殿堂像釈名　二、仏教的制度　三、仏教的儀式　四、仏教的勝迹　五、仏教文化芸術からなる。[16] その内

容構成が、〝仏教史志六種〟に、まことに酷似していることに気づかされるものである。云いかえると、〝仏教史志六種〟における周叔迦の無念が、将来とも斯学を鼓舞してやまないこととなるにちがいないこの「法苑談叢」に結晶させていったのであろう。

『法音』誌上公刊の第三の周叔迦珠玉集ともいうべきものが、「最上雲音室読書記」である。その大半は、経・律・論の諸疏の解説集といえよう。前節で知ったごとき周叔迦の仏典への淵博なる識見が盛りこまれている。これまた、斯学を益するに、余りあることと云うべきことである。

このように、周叔迦というひとの生きかたとその業績を知るとき、その歴史的意義は、中国近代後期から現代における、中国仏教のひとつの指標たりうるものといっても、決して過言ではないと、わたくしは認識するのである。

註

① 趙樸初の『法音』（一九八一―一）の「発刊詞」参照。

② 『大谷大学真宗総合研究所・研究所報』№14参照。

③ ㋑「漢文《大蔵経》中大乗経分類法的商榷」（『法音』一九八二―四）

㋺「法苑談叢」（『法音』一九八三―二・三・四・五・六）

㋩「最上雲音室読書記」（『法音』一九八五―二～六・一九八六―一～五）

④ 蘇晋仁撰「傑出的仏教学者和教育家周叔迦先生」（『法音』一九八二―一）

⑤ 知淵「《法苑談叢》簡介」（『法音』一九八七―五）

⑥ なお、表に示したごとく、周叔弢の生年は、一八九一年で、没年は一九八八年である。その根拠は、「全国政協副主席、中国仏協常務理事周叔弢逝世」（『法音』一九八四―三）の哀悼記事にもとづく。

⑦ 現在、『湯用彤論著集』が刊行されだしたが、嗣息の湯一介の了解のもとに行われているというのも、その例である。

⑧ 『文献』一九八九―一（総第39期）

⑨ 湯用彤著『漢魏両晋南北朝仏教史』の〝理惑論〟の項に、周叔迦は、『理惑論』が、漢末の牟融によって撰述されたとして、梁啓超の偽撰説をたしなめたことが紹介されている。

⑩ 『土観仏教史』とは、ツカン・ドブリ・チューキ・ニマ（一七三七～一八〇二）の原名『善説水晶鏡』のことであろう。

⑪ 最近、多羅那它（Tāranātha 1575～1634）著、張建木訳『印度仏教史』（一九八八年三月、四川民族出版社）を入手した。〝訳者序言〟をみると、周叔迦から翻訳を依頼されたことと、『ブトン仏教史』、『青史』の漢訳は、すでに遺失したという。なお五世ダライ・ラマの『西蔵王臣記』の訳本は現存すると云っている。

⑫ 未刊の六点とは、『仏画紀源』および『補遺』、『大乗起信論要釈』、『仏伝綜録』、『釈迦如来伝集』、『中国仏教史料』な

どであるという。なお、もし可能なれば、将来これらの未刊原稿が公刊されることを期待したい。

⑬　『中華大蔵経』は、数年前から刊行され始めている。

⑭　註の⑤に同じ。

⑮　前掲の註③の㋺参照。

⑯　「『法苑談叢』簡介」によれば、六章以降について、「第六章から第九章までにおいて、著者は、仏画、大蔵経、変文、羅漢などの諸分野にわたり、きわめて系統的に論述されている。〔中略〕第十章は〝漢族僧服を漫談され〟このテーマが波及さす問題は少なからず」といっている。

なお本稿は、一九八八年十二月十日、大谷大学で開催された仏教史学会研究発表会での口述発表に一部加筆したものである。

（本学助教授　東洋仏教史学）